



スキー案内（一般郷土史料B311）

文書館資料で
旅する山口県

防長紀行

❄️ 16

名所 ⑩

山口県のスキー場

《観光とレジャースポーツ》

「旅先で、体を使った遊びをしてみたい」。例えば、ゴルフ、スケート、スキー、サイクリング、マリンスポーツ、海水浴、釣り、キャンプなどは、旅の目的の一つとなり、観光案内のパンフレット類には必ずと言ってよいほど、それらが楽しめる場所の情報が紹介されています。

三方を海に開かれ、カルスト台地、渓谷など豊かな自然を持つ山口県には、そのような場所が数多くあります。ここでは、ウインタースポーツの代表で、かつて「本州最南端のスキー場」のうたい文句でにぎわった県内のスキー場に関する資料を紹介します。

《山口県におけるスキーの勃興》

山口県スキー連盟が平成9年(1997)に刊行した『五十年史』によると、山口県における初のスキーは、大正14年(1925)12月のことで、嶺亮介(旧制山口高等学校講師)が十種ヶ峰で、山根一郎(後の嘉年村村長・山口県スキー連盟

顧問)が台山で実施、とされています。

その後、以下のようなスキー場が次々と開かれていきます。十種ヶ峰(大正15)、台山・伏馬山(昭和4(1929))、鉢窪(昭和6)、元山(昭和8)、船平山(昭和9)、地福・三谷・生雲・羅漢山(昭和10)、畳が原(昭和11)、地福富士・白井が原・物見岳・九鬼ヶ原(昭和12)。

スキー愛好者が次第に増え、旧制山口高等学校や嘉年小学校など、スキーを実施する学校も増えていきました。これに伴い、貸スキーの充実や、休憩小屋・売店の設置などスキー場が整備されていきました。また、スキー場へのアクセスを容易にするため、徳佐駅からスキー場まで馬ぞりが運行され、村役場や山口駅にはスキー場情報が掲示されました。さらに、国鉄山口線のスキー客の運賃を一般2割引・学生4割引のサービスや宿泊客のため民宿がオープンするなど、スキー客受け入れの環境が整えられていきました。

それらが実を結び、昭和8年1月29日には十種ヶ峰スキー場には200名、元山



十種ヶ峰元山スキーの葉 (一般郷土史料B261)

徳佐スキー倶楽部の発行で、年代は不明です。

積雪量、雪質、気温、スキー可能時期、ヒュッテや売店等の設備、宿泊所の案内、貸スキー、インストラクター、交通手段などの情報が記されています。

十種ヶ峰は頂上から1,200mの緩急に富むスロープで、初心者から上級者まで楽しむ、元山は平坦なコースで特に初心者、幼児や高齢者に最適としています。

スキー場には100名のスキー客が詰めかけ、昭和9年のシーズン中には、5,000名を超えるスキー客が十種ヶ峰スキー場を訪れました。

《広島鉄道局発行「スキー案内」》

前頁の写真は、「スキー案内」という資料で、昭和10年に広島鉄道局が発行した色鮮やかなパンフレットです。表紙には、冠雪に輝く山々を背景に、スキーウェアに身を包み、スキー板を両手に微笑むスキーヤーの姿が、中面には颯爽と滑る姿が描かれています。これらのイラストは、このパンフレットを手にした人々をスキーへと誘います。

また、中国・四国地方のスキー場について、国鉄の最寄り駅と駅からスキー場までの距離などの情報が書かれ、地図でその位置が示されています。山口県内のスキー場も十種ヶ峰周辺を中心に数多く紹介されています。

スキー場とともに県内の温泉地も地図に書き込まれています。「スキーを楽しんだ後には、冷えた体を温泉でしっかり癒してください」と言っているかのようで、観光面での相乗効果が狙われています。

《スキー割引切符の発売》

裏表紙には、スキーシーズン限定の国鉄の割引切符

発売情報が記されています。県内では三谷、生雲、地福、十種ヶ峰、台山の各スキー場が割引切符の適用を受けており、割引切符発売駅や該当スキー場への最寄り駅が示されています。案内図では、適用を受けるスキー場が赤色で着色されています。

《スキー場風景》

さらに、中国・四国地方のスキー場が写真で紹介されています。下の写真はパンフレット発行の前年、昭和9年にオープンしたばかりの船平山スキー場で、多くのスキーヤーで賑わっています。当時のグレンデの様子を窺うことができる興味深い写真です。なお、このスキー場は山口線のすぐ側に立地したことから、スキーヤー達からの強い要望により、昭和14年からは臨時駅が設置されました。



船平山スキー場(同資料)



中国・四国地方のスキー場(同資料)